

音が鳴る「鐘」と聞きますと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？除夜の鐘じよやに使う大きな梵鐘ぼんしょうでしょうか。それとも、教会の鐘でしょうか。又は「祇園精舎ぎおんしょうじやの鐘の声」という『平家物語』の一節でしょうか。

曹洞宗のお寺では、法要の合図としてさまざまな種類の鐘を打ち鳴らします。ひとつ目には、大きな梵鐘ぼんしょうを打ちます。鐘楼しょうろうという専用の建物、鐘撞堂かねつきどうに吊るされている大きな釣鐘つりがねで、僧侶そうりよは合掌をしたのちに、両手で勢いをつけて、「ゴオン」と撞きます。鐘を撞くたびに丁寧に礼拝をするのが正式な作法です。因みに梵鐘の「梵」という文字は、「清らか」という意味があり、このゴオンという音は、多くの人々に仏教の教えに目覚めていただく役割も担っているといわれます。

霊場巡りのお寺などでは、仏様へのご挨拶という意味で、梵鐘を撞いてからお堂に赴き参拝するという作法もあります。江戸時代の初めにはほとんどのお寺に梵鐘が造られ、一刻毎つまり二時間置きに撞き時刻を知らせるという役目もありました。今では朝や夕方に撞くお寺が多いようですが、お昼の十二時に撞くお寺もあるようです。

二つ目には「殿鐘でんしょう」を打ちます。本堂や廊下の軒のきの近くに吊るされることが多い、梵鐘を小さくした鐘です。「これから法要儀式が始まります」と人々を呼び集めるためのもので、木槌きづちで間隔をつめながら繰り返し打ちます。

そして三つ目、法要が始まりますと、お経に合わせて「磬子けいす」という鐘を打ちます。これはお仏壇で使う「お鈴りん」を大きくしたものです。磬子の模様は、魚の鱗けいすを表しているともいわれています。大きいものでは、一抱えもある楯ひとかか(ばい)という棒で打ちます。

さまざまな使い方や目的を持った鐘ですが、法要中は特に聞く人それぞれの心に沁しみわたります。あるいは苦しみや迷いから目覚めることもあるでしょう。時間の流れの速さを教えてくれると同時に、今生かされている命の尊さや重さを気付かせてくれるのです。

法要以外でも、時にはお寺に足を運び、仏様にお参りをして、しみじみと、鐘の音色ねいろと響きを味わうように聞いてみてはいかがでしょうか？